

改定綱領が開いた「新たな視野」（講義レジュメ）

幹部会委員長 志位 和夫

はじめに——駐日大使館の方々からの2つの感想

一、綱領一部改定の全体像——党大会の結語での理論的整理

全党討論を踏まえた党の認識の到達点

綱領一部改定の作業のプロセスについて

二、中国に対する綱領上の規定の見直しについて

2004年の綱領改定——「社会主義をめざす新しい探究が開始……」と規定

- ・ 1998年の両党関係正常化——ここまで踏み込んだ干渉への反省は世界に例がない
- ・ 民主主義と人権の問題——両党会談で率直に提起した

その後の中国の変化——この10年余のわが党の体験と対応について

- ・ チベット問題、劉曉波氏問題——看過できない国際的な人権問題が
 - ・ 東シナ海と南シナ海——あらわになった覇権主義的な行動
 - ・ 2016年アジア政党会議——中国への見方を決定的に変える契機に
 - ・ 第27回党大会決議での大国主義・覇権主義批判——中国側とのやり取りについて
 - ・ 綱領改定——10年余の事実と体験にもとづいてくだった結論
- なぜこうした誤りが起こったか——2つの歴史的根源について

- ・ 自由と民主主義が存在しないもとの革命——革命後もこの課題が位置づけられず
 - ・ 大国主義の歴史——世界第二の「経済大国」となるもとの誤りが顕在化
- 今回の綱領改定の意義——半世紀余の闘争の歴史的経験を踏まえた「新しい踏み込み」

- ・ これまでは「社会主義（をめざす）国」の中に生まれた誤りの批判として
 - ・ 対外的に覇権主義の行動をとるものは、国内で社会主義をめざすと判断する根拠なし
- 国際的大義にたった批判をつらぬく

- ・ 世界の平和と進歩にとっての大義——公然とした批判は覇権主義への痛手に
- ・ 日中両国の真の友好にとっての大義——排外主義、歴史修正主義に厳しく反対する

三、植民地体制崩壊を「構造変化」の中心にすえ、21世紀の希望ある流れを明記した

改定前の綱領の「2つの構造変化が起こった」という組み立てを見直した

・改定前の綱領——「世界の構造変化」を2つの角度で整理

・「2つの体制の共存」という世界論にピリオドを打った点でも画期的意義

20世紀の巨大な変化の分析に立って、21世紀の発展的展望をとらえる

・世界論の抜本的な見直しによって、世界の見晴らしがグリーンとよくなった

・改定の具体的な内容——人権の問題を補強し、21世紀の希望ある流れを明記した

一握りの大国から、世界のすべての国ぐにと市民社会に国際政治の主役が交代した

・野党外交の強い実感の裏付け——核兵器禁止条約の国連会議

・核兵器禁止条約——世界の諸政府と市民社会が肩を並べてつくりあげた歴史的壮挙

核兵器禁止条約——NPT（核不拡散条約）という枠組みの性格が大きく変わった

・人類の歴史に前例をみない差別的な不平等条約

・条約第6条を生かして「核兵器のない世界」に進もうという流れの発展

・最悪の不平等条約から、核兵器禁止条約という「宝石」が生み出された

平和の地域協力の流れ——東南アジアとラテンアメリカの現状と展望

・東南アジア諸国連合（ASEAN）の成功——「話し合いを続けること」

・ラテンアメリカ——逆行や複雑さを直視するとともに、長い視野で展望をつかむ

国際的な人権保障の発展——ジェンダー平等について

・普遍的な人権保障の取り決めに土台に、さまざまな分野で国際条約・宣言が

・ジェンダーとは何か——日本でのジェンダー差別の2つの根っこ

・無意識の「しがらみ」から解放され、自己の力を存分に発揮できる社会を

・日本共産党としてどういう姿勢でとりくむか——学び、自己改革を

・科学的社会主義とジェンダー平等——エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』

四、資本主義と社会主義の比較論から解放され、本来の社会主義の魅力を示すことが可能に

改定前の綱領の立場——資本主義との比較論、「先駆性」の発揮への期待

・2014年の第26回党大会——「いやおうなしに対比が試される」

- ・ 中国における深刻な格差の広がり——比較論から解放された意義は大きい
- 格差拡大——資本主義をのりこえた社会への模索、社会主義への希望が広がっている
- ・ 「アメリカでは、若い世代の約70%が『社会主義者』に投票したい！」
- ・ 国連開発計画（UNDP）の報告書——「再分配を越える措置が必要」
- 気候変動——「社会のあらゆる側面で、前例のないシステム移行が必要」（IPCC）
- ・ 「2100年 未来の天気予報」——文字通りの「気候危機」に直面している
- ・ 「前例のないシステム移行」——資本主義の是非が根本から問われている
- マルクスの『資本論』は、解決の根本的道筋、手がかりを示している
- ・ 資本主義のもとでなぜ格差が生まれるのか、その解決の道はどこにあるか
- ・ 気候変動の問題——『資本論』の中に問題解決の手がかりがある
- 「社会主義の新たな出番」の時代——未来社会の展望、希望を大いに語ろう
- 帝国主義と覇権主義——3つの点で修正・補強を行った
- ・ アメリカ帝国主義の侵略性——2つの核心をより普遍的な形で記述
- ・ 「世界の構造変化」を踏まえた弾力的アメリカ論——将来を見据えていよいよ大切に
- ・ 「どんな国であれ覇権主義を許さない」——国際連帯の中心課題の一つにすえた

改定綱領は、未来社会への道を、より豊かに多面的にしめすものとなった

五、社会主義革命の世界的展望にかかわるマルクス、エンゲルスの立場が押し出せるように

マルクス、エンゲルスが明らかにした社会主義革命の世界的展望

- ・ “資本主義が進んだ国から革命がはじまり、イギリス革命が決定的意義をもつ”
- ・ ヨーロッパ革命と遅れた国ぐにの变革の関係——エンゲルスが描いた展望

中国に対する綱領上の規定の見直しは、未来社会論でも新たな画期的視野を開いた未来社会に継承すべき「5つの要素」——マルクス、エンゲルスが力説したもの

- ・ 「高度な生産力」——未曾有の生産力を発展させ、未来社会の物質的土台をつくる
- ・ 「経済を社会的に規制・管理する仕組み」——銀行制度は未来社会に進むテコになる
- ・ 「国民の生活と権利を守るルール」——「新しい社会の形成要素」を成熟させる
- ・ 「自由と民主主義」——「民主共和制」を一貫して掲げ続けた
- ・ 「人間の豊かな個性」——「個性」の発展という角度から人類史を概括

綱領で「5つの要素」としてまとめた形で整理した意義——4つの角度から

・ 発達した資本主義国における社会変革が「大道」であることを理論的に裏付けた
・ 未来社会のイメージ——「豊かで壮大な可能性」がより具体的につかめるようになった

・ 「今のたたかいが未来社会へと地続きでつながっている」ことが明瞭になった
・ 旧ソ連、中国など——自由と民主主義、個性の発展などの取り組みは無視された
日本共産党が置かれた世界的位置を深く自覚して、力をつくそう

・ 日本共産党は世界的にも重要な位置に押し出されている

・ 「特別の困難性」を突破した先には、前人未到の「豊かで壮大な可能性」をもつ未来が